

小倉紀蔵著 『韓国の行動原理』

PHP 新書, 2021 年

「『それで?』と、よく言われるからじゃないかな」

歴史認識紛争は日韓や日中の中限ったものではなく、冷戦終結後に世界各地で多発している。だがそうした指摘は主に欧州の政治や歴史を専攻する研究者からされており、朝鮮半島や中国を研究する専門家からは聞かない。なぜ欧州の専門家ののだろうか。ある国際法研究者の前で疑問を口にする、自分たちも似たようなものだと思いつつながら冒頭の言葉が返ってきた。

政府関係者を含め、研究者以外の人に専門分野の話をする、「それで? 日本に何か関係あるの?」と聞かれることが多いのだという。そうした反応にさらされていると自然に日本との絡みを意識させられるから、自らの研究対象とする地域の事象と東アジアの共通性に敏感になるのではないか。そういう見立てだった。

朝鮮半島、特に政治や経済に関係する分野の研究者とはまるで違う状況に置かれているという訴えでもある。しかし朝鮮半島研究者の側からは「そんなに気楽なものではない」という強い反論がされるのではないだろうか。問題は、専門家の中から見て妥当とは言いがたい「私の韓国」や「私の北朝鮮」イメージを持つ人との接し方である。

一般向けの新書を書く場合には、「それが?」という問いかけに見舞われる専門家たちの方が気楽なのではないかとすら思える。彼らは、限られた知識しか持たず、それだけに強い思い込みもない読者を想定できるのに対して、朝鮮半島の場合は全く違う。限られた範囲の偏ったものであったとしても、分量としては相当に多くの知識を持ち、「私の韓国」や「私の北朝鮮」という確固たるイメージを頭の中に持つ人々が読者の中にいると考えないといけな

本書の冒頭で紹介される女性の一つの典型だ。「日本より文化財保護に熱心な韓国」という確信を持つ彼女は、それを否定する筆者に怒り出す。筆者が「韓国はダメだ」と切り捨てたわけではないにもかかわらず、単純な否定だと断定する彼女は「ありえない」話をする専門家の存在を受け入れられないのだ。筆者は、彼ら、彼女らを「性急なひとびと」と評する。嫌韓や韓国びいきなど方向性はバラバラながら、「性急」である点では同じだという人は枚挙に暇がない。

筆者の思いは、新型コロナウイルスのパンデミック初期の対応を巡る次のような文章に象徴される。

「コロナ禍対策として国家単位の優劣が安易かつ性急に語られ、その結果、国家にパワーが付与された。韓国の対策を単純に評価はできない。戦前日本の治安維持法に似た国家保安法があり、かつ軍隊の役割が非常に大きいという条件が、韓国のコロナウイルス対策に影響しているからである。そのことに韓国社会が苦しんでいるという状況を知らずに、いたずらに『韓国の対策はすばらしい』と語ることは、韓国人に対するオリエンタリズムであるし、蔑視でもあると、私は思うのである」

筆者は、日本左翼と保守それぞれの「朝鮮半島認識」に潜む「韓国・朝鮮への蔑視」を批判する。この20年ほどの間に日本の朝鮮半島研究が成果を挙げたにもかかわらず、それが左右両派に都合よく利用されていることへの憤りの表明とも言える。

日本左翼は、「韓国人・朝鮮人・在日こそ道徳的で、日本人は不道徳」という枠組みを死守してきたと批判される。「自分たちの目的（日本の保守や侵略性への批判）を推進するために、韓国人・朝鮮人・在日の多様で実存的で魅力的な生をすべて画一化し、『道徳的な怪物』にでっちあげてしまった。（中略）虚偽の歴史を捏造し、韓国人・朝

鮮人・在日の生の多様性と主体性を無化して画一化し、それを単なる利用対象としてしまったのである。これが蔑視でなくてなんなのか」と手激しい。

これを読んで評者は20年近く前の出来事を思い出した。韓国社会において「羨望」と「反発」どちらの対象としても日本の存在感が大きく低下したことを論じた原稿を大手出版社に持ち込んだところ、韓国びいきだとされる編集者から「日本人がそんなことを言うのは失礼だ」と出版を断られたのだ。「韓国社会の反日は変質しており、かつてのような重みはない」という指摘を問題視されたようだった。売り上げが見込めないとか、原稿がつまらないという理由ではなかったことに驚いて「あなたの見解は韓国を見下すものだ。現実を見ずに『韓国はこうだ』と決め付けるのは、韓国人々に対して失礼だ。そう思わないのか」と返したのだが、全く理解されなかった。この編集者もまた、「性急なひとびと」の一員だったのだろう。

当然のことながら、筆者の批判は保守にも向けられる。「民主的な社会の公的空間において到底容認できないレベルのヘイト的なもの」が多い保守側の言説には、「蔑視の領域に属するものが多い」という指摘は妥当だ。こちらの側で深刻なのは、左右の理念に偏らない研究者たちの真摯な営為が恣意的に利用されていることだ。「伝統的に日本人が持っている韓国・朝鮮への強い差別意識の土台のうえに、この20年のあいだに蓄積された客観的で高度な朝鮮半島認識が都合よく加味されている」と筆者は慨嘆する。「つまり嫌韓派は、この20年のあいだに日本で蓄積された、右でも左でもない客観的な認識を表面的に取り込むことによって、あたかも自分たちの認識は客観的であるかのように装っている」。

筆者は本書の目的と関連して、「多くの方に韓国人の考え方について、より実態に近い形で知っていただきたい」と記す。この思いは、多くの専門家に理解されるのではないだろうか。そのための実践として一般向けの新書は使い勝手がよいものだ。2022年の出版としては、『韓国愛憎 激変する韓国と私の30年』（中公新書）、『誤解しないための日韓関係講義』（PHP新書）という木村幹

の新書2冊もまた、方向性を同じくするものと言える。学術的な論文の発表にとどまらず、研究者がそれぞれの個性を活かしたアプローチで社会に成果を還元することは、もっと積極的に評価されていい。

本書は「韓国の行動原理」と「『戦後最悪の日韓関係』をどう見るか」という2部構成になっている。筆者の専門である韓国哲学を切り口に現在の韓国社会について論じるものだ。

韓国の社会意識における朱子学の位置付けについての解説は筆者の独壇場である。近代化が至上命題だった時代に高かった北学派や開花派への評価は、ポストモダンの時代に入ると共に急速にしぼんだ。韓国社会の関心は「近代の弊害」へと急速に移り、「北学派や開花派よりも正統朱子学や東学のほうに積極的な意義を見出す言説が増えたのである」。

ここから日韓のすれ違いが深刻なものとなる。ここから日韓のすれ違いが深刻なものとなる。「日本のポストモダンが脱道徳的な傾向を持っていた（傾向であって本質ではない）のとは反対に、韓国のポストモダンは、近代の時代に抑圧された道徳性の十全な復活という側面を持つ」からだ。そして「類型として、北学派と親日派が同じパターンに属している」ことが問題となる。「野蛮な日本は邪悪にも朝鮮を侵略して支配した。それなのに親日派は日本を評価し、日本に学ぼうと考えた。これほど正統性・正当性の欠如した輩はいない。北学派を糾弾した執権党・老論士大夫の考えと、親日派を糾弾する解放後の抗日派の考えは同じ類型のものなのである」。

こうした観点から本書では、日韓双方の法に対する意識の違いや韓国社会でなぜ「市民」の政治的影響力が強いのか、韓国の進歩派が北朝鮮に引け目を感じるのとはなぜか、などについて日本との対比を軸に説明される。

それは、近年の日本が自国社会に対する省察さえ内向きになりがちであることへの警句でもある。筆者は「日本の政治や社会の変化を、日本一国の文脈や欧米との比較という文脈だけでなく、韓国との比較という文脈でとらえてみるならば、これまでとは違うかなり明確な分析が可能だ」と主張するのである。

日本と韓国の関係は冷戦終結の時期を境に大きく変化した。両国の国内的な変化もまた、冷戦終結という国際社会の大変動の影響を色濃く反映したものが多し。結果として、経済や科学技術、民主主義など考えるほとんどの面で日本が圧倒的優位に立ち、安全保障上の理由で「反共のとりで」である韓国を日米が支えていた時代は遠く過ぎ去った。日韓はいまや、完全に対等な主権国家として向き合っている。

にもかかわらず自民党の衛藤征士郎・元衆院副議長は2022年になってもまだ、日韓関係について「韓国はある意味では兄弟国。はっきり言って、日本は兄貴分だ」と発言した。時代錯誤も甚だしい発言ではあるが、象徴的なのはむしろ、韓国でとりたてて騒ぎにもならないことだろう。日本の

方が感情的になりがちだという近年の日韓関係を、よく見せてくれる光景のように思われる。

筆者にひとつ物申すとすれば、「政治・外交・経済・社会などの専門家たち」が日韓関係の変化を表面的なものとしているという主張の妥当性だろう。筆者の指摘するように「日韓摩擦は表面的なものではなく、まさに構造的・深層的・本質的なものである」。こうした視点は筆者に限ったものではない。私見では、むしろ韓国ときちんと向き合っている専門家であるならば、ジャンルを問わず共有されている。変化の本質を見極めるには哲学的な考察が必要だという主張が首肯できるものであるだけに、この点には寂しさを感じさせられた。

(澤田克己 毎日新聞)